



保育随想

青すずめ

赤すずめ

葛原しげる

昔も昔大昔、今は国立公園として、絶景を天下に誇っている瀬戸内海が、北へ深く湾入していたという「穴の海」の故地——広島県東部、国鉄山陽本線の福山駅から北西への支線、福塩線南部の沿線一帯の平野でなく——その中途の神辺駅から北東、岡山県の井原駅への私鉄、井笠線一帯の「穴の海」の故地的一部分たる「御領平野」の真ん中に通じている東西一キロあまりの直線道路「中島みち」。

これも昔は、狭い田圃道で、人通りも少なく、人力車が行き違ふ事も楽でなかったのが、先年、拡げられた上、近郊いくつの

村々と共に神辺町に合併以来、手入れも行き届き、道沿近い田圃の南側に、二階建の大きい校舎二棟の中学校も新築され、文房具店が並んだり、一日六往復のバスもバスしたり、「中学校前」という停留場も出来たりして、今の「中島みち」は活気づいている。

そのバスに乗合った村人の或る日の会話。

「近頃は、どこにも、立派な学校が建ちますのうや、」

「そうよのう。結構な事でのう、」

と、改めて、新築の中学校を窓近く見やつて満足げであった。多くもいなかった乗合の村人たちも、だまって、新築校舎を見やつて、心の中で、

「学校が立派になるのは、結構じゃのう」と肯いた。

その後数年にして、最近、この中島みちを隔てて、北側に、昔から在る小学校が、老朽の故に、新築工事が始まってからの或る日の村人たちの会話。

「小学校も、新築されるのう、」

「そうよのう。結構な事でのう、」

「大分、大けえのう、」

「大けえよう。結構よのう、」

「やっぱり、二階建と見える、」

「中学校の通りと見える、」

「どっちも、大きな屋根じゃのう、」

「そうよのう、結構よのう、」

毎日出かけない私も、時折、バスで見通っては、工事の進行を楽しんだ。やがて、大屋根に、白く、板が張りつめられたのが、一日見ぬ間に、青一色に、塗り替えられたのでなく、青瓦で葺きつめられた。広い田圃の中で、目立つこと、おびただしい。バスの中でも、誰彼が、口を揃えた。「結構じゃのうや」「ほんまにのう」

改めて見直すまでもなく、反対側の、中学校の屋根は、赤瓦なので、対照がおもしろくて、早速、拙作を試みた。

さて、この小学校にも、あの中学校にも、広い運動場があつて、毎朝始業前から、午後は放課後遅くまで、中学校では、男生徒も、女生徒も鮮やかな白ズボンで、先生方と、熱心にスポーツで、心身を鍛えている。その楽しさを見下して、どちらの学校の屋根の上でもの、雀たちの或る日の

会話――。

「人間の子どもは、いいなア」

「先生と、運動できて……」

「僕たち雀も、この大きい屋根で、運動しようよ」

「そうしましようよ。私たちも、ね、ぎ、チイチイ、パッパ、チイパッパ」

とか、何とか、嬉しい屋根の運動場であるに相違ない。

一体、人間の世界では、昔から、朱に染まれば赤くなるといい、誰でも友人を見れば誰でもの人柄が分かるという。また、孟母三遷の訓も古いし、動物の世界では、神秘的な保護色さえ与えられている。

また、人間の世界に、子どもが、いつでも、どこにでもいるのと同じく、雀は、日本中、どこにでも、いつでも、殆んど人間とともにいる。

その雀たるや、鳳凰や極楽鳥の如き豪華な存在ではない。平々凡々の小鳥である。人間の子どもの中には、天才、神童もいるというが、雀には、そんな特殊な存在、有りや無しや知る所ではないが、昔から憎めない小鳥なので、お馬が通れば、「そこの

けそこのけ」であった。また

雀よこい 下りてこい。

お米あげよう さア おたべ

バラ バラ バラ

バラ バラ バラ

である。すると、雀は、いともすなおに、

はい はい はい 来ましたよ

お米 おいしや ありがたや

チュン チュン チュン

チュン チュン チュン

である。

かくて、チルチルミチルの探した青い鳥は、一羽ぐらい、青い屋根にいてくれないものか。終日、青屋根で遊んでいた雀の中に。

赤屋根で、終日遊んでいた雀たちは、皆、夕日をあびて、赤く見えたのか。

ぎんぎんぎらぎら沈む夕日を見ていた友達かみすの頬っぺが、赤く見えるので、鳥の黒い翼も、赤くは染まらないものか。

さて、「青すずめ赤すずめ」が、幼児向でないのは、残念ながら、

小学校と 中学校

どちらも 長い二階建

道路の北のが 小学校

道路の南に 中学校

道路は 田んぼのまん中の

一文字路 広い路

生徒が並んで かよう路

時々 バスも とおる路

小学校は 青い屋根

青好きなのが 小学生

中学校は 赤い屋根

赤好きなのが 中学生

どちらも 広い運動場

子どもが 元気に遊んでる

どちらの屋根も広いので

大よろこびの雀たち

一日 屋根で遊んでて

すっかり 青くなるだらう

小学校の雀たち

ほんとに いないか 青雀

中学校の赤屋根じゃ

一日遊んだ日暮れ方

皆が 赤く染まっていた

夕日をあびた雀たち

いつでも、どこにでもいる日本の雀——
つまりは、いつでも、どこでもで見える我ら
の子ども、わけて、路傍の、通りすがりの、
大事な子どもたちにも、おとなわれらは、お
とな色彩を、つけてはならぬのに、目か
ら、耳から、あまりに多くの、おとなの、
あれや、これやが、よからぬ色彩を、また
音響をさえ、強いているのではなかつたか
——ラジオで、テレビで——いえいえ、子
どもの世界にいるおとなわれらが、ほんの
少しでも……。

さて、さて、私の夢、今のこの世
に、ただ一つの楽しい夢、それこそは、早
く、月世界に旅行して、昔も昔も大昔の、
大々昔から、満月のまん中で、兎がついて
いるというお餅は、ずい分どっさりこと、
つけているに相違ありませんから、あんな
り欲ばって、みんなといわないで、半分ほ

どといっても、ほんとうにどっさりこと貰
って、地球上、世界中の、いえいえ、日本
中のお子さん達へ、お土産にしたいこと、
これ、ただ一つ。

よし、こればかりは、所詮かないっ
のない夢の中の夢にしても、日本中、多く
の幼稚園や、保育所托児所の屋根は、大
い、美しい青屋根赤屋根でありますので、
青雀か、赤雀か、たったの一羽だけでも、
見えないものでございましょうか。

これこそ、もし、おとな私の妙な色彩を、
大事なお子さんへ強いる事に、なりますで
しょうか、おそろしや。それとも、万一、
「そうよのう、結構な事でのう」

ど、どこかの、どなたさまかが、おっしゃ
っては下さりますまいか。(おとそかげん
でもござりませぬ。昭和三十六年正月十五
日。東京西片町宅にて)

庭

新庄よしこ

寒椿のところどころに花をひそませた低

い生垣のその中を、飛石づたいに歩いて行
けば、いとも静かにつくばいに落ちる筈の
水といった風流の庭。或いはずっと趣向を
かえて芝庭の広く大きく、あちらこちらに
人たけ程のたくましき松ばかり、それに添
うかの如く手入れの届いたバラの、これも
数は少なく、このとり合わせ濃緑と淡紅の
なんと雄々しくも美しきかな と忘れられ
ぬ かくて庭のありさまは有名無名数知れ
ず書いても書いてもきりのあるものではあ
りません。今ここで私が申したいのはこう
いうのをいうのではなくて、毎日毎日幼児
との心のつながりの深い幼稚園の庭のこ
と、全くかわりの無い人々からは、なあ
ーんだとでも言われそうな、ところがそう
ではありません。どちらの幼稚園でも園児
のおるかぎり一木一草、枝を折ったら折っ
たで、草が生えればそれで、どんなき細な
ことでも人間の重大な成長の役目をここに
見出すことが出来るので庭というものは保
育室と同じ或いはもっと大切なところと思
っております。

みんながそれぞれうちへ帰ってしまっ
てからあとしばらくの間、お帰りの前には、
紙きれは屑籠へ、砂場には蓋を、古タイヤ